

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520441

研究課題名(和文) 時制とその周辺領域の発展的研究

研究課題名(英文) Developmental research on tense and its related domains

研究代表者

太田 聡 (OTA SATOSHI)

山口大学・人文学部・教授

研究者番号：40194162

研究成果の概要(和文)： 英語、日本語、ドイツ語、フランス語、朝鮮語、オランダ語など、様々な個別言語に見られる時制とその関連現象を分析して、時間の認識や表現に関して人間言語が共有している普遍の特徴と原理を解明した。そして、理論的には、研究分担者の一人である和田尚明の開拓した合成的時制理論(compositional tense theory)が、様々な時制関連現象の説明に極めて有用であることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： Through the analyses of tense systems and tense-related phenomena in various languages such as English, Japanese, German, French, Korean and Dutch, we have clarified some universal characteristics and principles concerning the recognition and expressions of time in human language. Moreover, we have demonstrated that the compositional theory of tense proposed by Naoaki Wada, one of our co-researchers, is very useful and appropriate for the explanation of diverse tense-related phenomena.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野： 日英語音韻論・形態論

科研費の分科・細目： 言語学・英語学

キーワード： 時制、アスペクト、モダリティ

1. 研究開始当初の背景

山口大学には、時制やアスペクトやモダリティ関係の研究を中心に行っている研究者が多く、また、その理論的背景が多彩であったので、統一テーマの下で共同研究を行えば大きな成果が得られることが期待できた。山口大学の英語学(言語学)の教員は、古くから「山口大学英語学研究会」を毎週開いてきたが、特に平成12年度からは「時制とその周辺」というテーマを掲げて、研究発表・情

報交換を行ってきた。また、平成15年度からは、一貫して時制理論の開発を行ってきた筑波大学の和田尚明氏を研究分担者に加え、定期的に時制理論研究会・報告会を開いてきた。さらに、我が研究グループは、平成16年度からは山口大学第I期研究推進体の認定を受け、また、平成17年度からは山口大学時間学研究所の理論的時間研究を担うグループの一つに認定され、時制に関する研究を推進する体制を着実に整えてきた。

2. 研究の目的

本研究では「自然言語はどのようなメカニズムで時制現象を文法原理に組み込んでいるのか」という問題について考察する。この問題に取り組むに際し、和田の合成的時制理論を研究の支柱とする。この理論は従来の時制理論が抱えていた問題点を克服した最新の有望な理論である。そして、和田理論の妥当性の検証を次の三つの観点から行う。(i) 比較言語論からの検証： 和田理論では十分に分析されていない言語（例えばフランス語や朝鮮語）も含めて、様々な個別言語に特有の時制（関連）現象を調べる。(ii) 時制関連現象からの検証： アスペクトやモダリティといった時制に関連する現象を、和田理論における仮説を拡張・修正することで説明できるかどうかという可能性を探る。(iii) 理論的観点からの検証： 和田理論における仮説が、どのように他の文法理論（例えば、形式意味論、認知意味論、生成統語論、拡散形態論など）の原理・原則と関連しているのかについて考察する。

3. 研究の方法

研究分担者それぞれの得意分野に応じて研究の役割分担を決める。そして、分担者による個別研究については、従来通り毎週1回の研究会を継続して、順に研究発表を義務付ける。また、理論的中核者である和田に山口に滞在していただき、講演や集中的な議論の機会を持つ。さらに、様々な学会での研究成果の発表を積極的に行う。

4. 研究成果

研究分担者ごとに主な研究成果をまとめると以下ようになる。

(1) 時制理論開発担当の和田尚明は、

- ① 英語と同じく人称・数・法と一体化した時制屈折辞を持つ西欧諸語の時制現象の相違を「公的自己中心性」という程度概念の違いから説明した。
- ② 時制解釈の主体としての話者を中心にした包括的時制モデルでもって、特に知覚動詞補部における日英語の時制現象の比較分析を行った。
- ③ 英語の *be going to* と現在進行形の共通点・相違点を、自身の提案する時制理論と文法化の観点から体系的に説明した。
- ④ 英語の過去形が表す時間値が複数であるという事実の説明や、英語とオランダ語の現在完了形が異なる意味範囲を持つ理由の解明や、*will*-文の時制解釈メカニズムの分析など、多方面から自身の時制理論の妥当性を証明していった。

(2) 総称文・進行形の研究担当の岩部浩三は、
① 総称文には潜在的な法助動詞が含まれているという仮定を立てて、そのことから説明が可能になる事象を洗い出した。そして、過去形の総称文には規則読みが不可能であることや、不定単数形を主語に持つ過去時制の文は総称文になれないことなどの説明を試みた。

② 様々なタイプの総称文の読み可能性について、特に数量化という視点から統一的な説明を試みた。

(3) 朝鮮語の時制・アスペクト研究担当の和田学は、

① 朝鮮語の語彙的受動文の様々な変種が、項構造の違いに応じて2種類に単純化できることを主張した。また、受動文の変種は格形式の他にアスペクトにおいても違う可能性があることを示唆した。

② 朝鮮語の軽動詞構文を対象に、文法性の判断に統計的手法を導入した研究を進めた。

(4) フランス語の時制研究担当の武本雅嗣は、

① 英語の現在分詞構文とフランス語の現在分詞構文およびジェロンディフ構文の機能と意味について考察し、現在分詞が手段よりも原因を表しやすいのは主節への従属性が低いからで、ジェロンディフが原因よりも手段を表しやすいのは主節への従属性が高いからである、という結論を得た。

② 主としてフランス語とドイツ語の虚構移動表現における移動動詞の使用の可否について論じた。そして、物理的移動には外的世界で時間が関わっているのに対して、虚構移動には心的レベルでのスキニングの際に時間が関与することを明らかにした。

③ 英語とフランス語の間の、並立的・同時的な事態を表す形式の相違について分析を行い、コピュラ動詞と非定形動詞の結合による継続相・進行相の文法化の多様性を指摘した。

(5) 時制・アスペクトの文献学的研究担当の松谷緑は、

① 特に英語の進行形に着目し、その成立の背景を踏まえて、動詞との共起関係における機能の多様性を考察した。さらに、モダリティ部門との関連において、*will*, *must* と *be -ing* 形式の共起実態を調査した。

② 英語の時制について、18世紀から現在に至る通時的变化が引き起こす現象に注目する一方で、近代後期の英語小説の語りの技法に動詞形式が果たす役割の解明を行った。

(6) 英語とフランス語の仮定法の時制研究担当の Nathaniel Edwards は、

- ① 英語の仮定法の起源を、時を限らないドイツ語の過去形と現在形の進化に結び付ける提案を行った。
- ② 英独仏語の熟語表現のうち時間関係を含むものを分析して、英語の場合には「動き」に関連する熟語が多くて、独仏語の場合には「宗教や死」につながるものが多いなどの傾向を捉えた。
- ③ フランス語の文学的な仮定法過去を検討し、それらが徐々に使われなくなる傾向にあることを明らかにした。また、言語の変化に時間が与える影響について考察し、文法化がどのように進むのかを分析した。
- ④ 時制の歴史的な発展をより深く理解するため、多種文化の時間に対する認識などの比較を行った。また、時間に関する哲学的論文を参照しながら、仮定法に関する新しい分析方法を提案した。

(7) 総括、および、時制要素の形態的・音声的具現化システムの理論化担当の太田聡は、

- ① これらの研究をまとめるとともに、種々の分析結果を合成的時制理論でどのように捉え直すことができるかを検討した。
- ② 英語の屈折変化の規則的なものと不規則なものを生み出す二重メカニズムのモデルが、派生語の生成モデルとしても有効であることを論じた。
- ③ 英語や日本語などの過去形がなぜ丁寧さを表すことができるのかを、和田理論を援用しながら、解明した。

今後、この共同研究プロジェクトをさらに発展させることで、個別の理論的枠組みにとられない普遍的な時制理論を構築できるはずである。さらには、山口大学全体として進行中の学際的な時間学研究を促進させ、哲学や生物学など他の分野の研究者との交流・協力によって、新たな学問分野の創出という学問的貢献も可能になると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 20 件)

- ① Wada, Naoaki “On the Mechanism of Temporal Interpretation of *Will*-sentences,” *Tsukuba English Studies*, 査読有, 29, 2011, 37-61.
- ② 武本雅嗣 「英語の統合型現在分詞に対応するフランス語の非定形動詞について」『独仏文学』査読無, 32, 2011, 107-116.

- ③ 和田尚明 「現在完了形の表す意味範囲の変遷と C-牽引：英蘭語比較研究」『文藝言語研究：言語篇』査読無, 58, 2010, 75-112.

- ④ Wada, Naoaki “On the Distinction of English Past Tenses,” *Distinctions in English Grammar, Offered to Renaat Declerck* (Bert Cappelle and Naoaki Wada (eds.)), 査読有, 2010, 42-71.

- ⑤ Takemoto, Masashi “Manner-of-Motion Verbs and Subjectification,” *Journal of Cross-Cultural Studies*, 査読無, 4, 2010, 15-26.

- ⑥ 和田学 「韓国語のいわゆる軽動詞構文の分類」『山口大学文学会志』査読無, 60, 2010, 75-91.

- ⑦ 和田尚明 「『内』の視点・『外』の視点と時制現象」『「内」と「外」の言語学』(坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編)) 査読有, 2009, 249-295.

- ⑧ Wada, Naoaki “The Present Progressive with Future Time Reference vs. *Be Going To*: Is Doc Brown Going Back to the Future Because He Is Going to Reconstruct It?” *English Linguistics*, 査読有, 26-1, 2009, 96-131.

- ⑨ 太田聡 「人や道具を表す英語の接尾辞について」『英語と英米文学』査読無, 44, 2009, 1-15.

- ⑩ Wada, Naoaki “Review: Renaat Declerck (in cooperation with Susan Reed and Bert Cappelle) *The Grammar of the English Verb Phrase, Volume I: The Grammar of the English Tense System: A Comprehensive Analysis*,” *Studies in English Literature*, 査読有, 50, 2009, 264-274.

- ⑪ 和田尚明 「公的自己中心性の度合いと西欧諸語の法・時制現象の相違」『ことばのダイナミズム』(森雄一他 (編)) 査読有, 2008, 277-294.

- ⑫ Wada, Manabu “Re-classifying the Lexical Passives in Korean,” *Harvard Studies in Korean Linguistics*, 査読有, 12, 2008, 618-629.

- ⑬ 武本雅嗣 「Faux Amis または False Friends について」『異文化研究』査読無, 2, 2008, 135-143.

- ⑭ Edwards, Nathaniel “The Past Subjunctive in English: The Unreal Past,” *English and English-American Literature*, 査読無, 43, 2008, 1-7.

他 6 件

[学会発表] (計 11 件)

- ① Ohta, Satoshi “On the relationship between *rendaku* and accent,” 日本語学会第 141 回大会, 2010 年 11 月 28 日, 東北大学, 仙台

- ② 和田尚明 「日英語時制現象の対照言語学的分析」日本フランス語学会 11 月期談話会『時制体系をめぐる対照言語学的視点』2010 年 11 月 13 日, 京都大学, 京都

- ③ 武本雅嗣 「虚構移動表現と主体化」日本フランス語学会 2009 年度シンポジウム, 2009 年 5 月 23 日, 中央大学, 東京

- ④ 和田学 「韓国語受動文の語彙表示」レキシコンフォーラム 2008 Part II, 2008 年 7 月 5 日, 神戸大学, 兵庫

他 7 件

[図書] (計 2 件)

- ① Cappelle, Bert and Naoaki Wada (eds.), *Kaitakusha, Distinctions in English Grammar, Offered to Renaat Declerck*, 2010, 361.

- ② 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編), 開拓社, 『「内」と「外」の言語学』, 2009, 430.

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)
○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 聡 (OTA SATOSHI)
山口大学・人文学部・教授
研究者番号: 40194162

(2) 研究分担者

和田 尚明 (WADA NAOAKI)
筑波大学・人文社会科学研究科・准教授
研究者番号: 40282264

岩部 浩三 (IWABE KOZO)
山口大学・人文学部・教授
研究者番号: 90176561

和田 学 (WADA MANABU)
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号: 10284233

武本 雅嗣 (TAKEMOTO MASASHI)
山口大学・人文学部・教授
研究者番号: 10294612

松谷 緑 (MATSUTANI MIDORI)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号: 70259737

エドワーズ, ナサニエル (EDWARDS NATHANIEL)
山口大学・大学教育機構・准教授
研究者番号: 50403647

今井 新悟 (IMAI SHINGO)
筑波大学・人文社会科学研究科・教授
研究者番号: 50346582
(H21→H22: 連携研究者)

(3) 連携研究者

島 越郎 (SHIMA ETSURO)
東北大学・文学研究科・准教授
研究者番号: 50302063

前田 満 (MAEDA MITSURU)
愛知学院大学・文学部・准教授
研究者番号: 20253180